

今年度も多くの三年生が卒業後の進路を決定する季節となりました。

進学を希望する生徒たちは、年度当初から、一般受験や小論文、志望理由書など、希望の進路先への入学に向けて様々な努力をしていました。

以下に紹介する文章は、今年度の受験の課題として生徒が実際に作成したものです。

様式の関係上抜粋しておりますが、実際には4000字のレポートを作成しています。

夏季休業中も関係する教科担当者達の指導のもと繰り返し改稿を行い、自身の進路を勝ち取ることができました。

私は今回の研究旅行でオーストリア、ハンガリー、チェコ、スロバキアを訪れ、ハプスブルク家の生活と歴史について研究する。

ハプスブルク家は600年以上もウィーンに君臨し続けオーストリアだけではなく、周辺地域の多くに領土を獲得し、影響を与えた。この歴史の中で形成されてきた各国の観光名所への訪問を通してハプスブルク家の生活や歴史を理解し、研究をしていく。また各国での食事を通じて食文化を知る。さらにカメラを持っていきハプスブルク家が関係している宮殿や城には驚の紋章が必ずあるためそれを採って写真に収め、帰国したのちに旅ノートに記録したい。また各国に残るハプスブルク家御用達のお店を周り、そのお店の歴史や、ハプスブルク家にゆかりのある商品を紹介してもらい購入をする。

(略)

ウィーン滞在7日間の内訳は以下の通りである。まず1日目は現地に移動して終了とし、2～5日目にホーフブルク宮殿とシェーンブルン宮殿および街歩きをしハプスブルク家御用達の店を訪れる。6日目にはベルヴェデーレ宮殿へと訪れ7日目にスロバキアのブラチスラバへ日帰りに向かう。

ホーフブルク宮殿は元々はハプスブルク家の宮殿ではなかったが、ルドルフ1世が奪った。またホーフブルク宮殿にはアウグスティナー教会があり、そこにはハプスブルク家の人々の心臓が54個も安置されており、長年にわたってハプスブルク家が安定してウィーンを支配し続けてたことがわかる。また、シシィ美術館や、銀器コレクションなど、当時の皇帝たちが使っていた物を直に見ることができるため、どのような生活を送っていたのかを調べる。次にシェーンブルン宮殿に向かう。18世紀初めに建てられ、マリア=テレジア以降のハプスブルク家の夏の離宮として好まれていた。外装はバロック様式だが中に入ってみると部屋の多くがロココ様式になっている。バロック様式が流行った時代は16世紀末から17世紀初頭といわれ、対してロココ様式は18世紀から始まったとされている。このことから察するに100年以上かけて改良し完成させた建物ということがわかる。ここでの私の目的はハプスブルク家の人々の芸術に対する考えを調べることだ。シェーンブルン宮殿の内装から皇帝たちの美術へのこだわりを感じることができるだろう。その後私はウィーンの街並みを路面電車を使い一周し、見学をする。路面電車から眺める現在のウィーンの旧市街の街並みは歴史主義建築となっており、バロックやゴシックなど過去の建築様式を復古させている。これは歴史を尊重しウィーンがつなげてきた文化的なものを継続させていることがわかる。

以下略